

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午前】
部会名	小学校 体育部会

テーマ 『ボールを持たないときの動きの向上を目指して～「スリーサークルボールゲーム」を通じて～』

提案概要

【課題意識と実践】

ボール運動について事前アンケートを行ったところ、ボールを持っていない場面をつまらないと感じている児童が多いことが分かった。その結果を受け、次の3つの視点を持ち、実践に取り組んだ。

- ① 児童の実態に合った「技能」「態度」「思考・判断」の指導内容を整理し、これらをバランスよく身に付けさせるための単元計画を作成する。
- ② 指導内容を確実に身に付けさせるための指導内容、教材、教具を工夫する。
 - ・「ゲーム - 発問 - 練習 - ゲーム」の流れを意識し、児童の戦術的気づきとゲームパフォーマンスの向上を図る。
 - ・「スリーサークルボールゲーム」を通して、「ボールを持たないときの動き」を高める。
- ③ 体育における社会的行動を高めるための活動を仕組む。

【成果と課題】

児童がボールを持たないときの動きを高めるという目的を意識して、意欲的に動いていた。

目標達成の手立てとして取り入れた「スリーサークルボールゲーム」は、児童の動きが飛躍的に向上し、身につけた動きがその後の「メインゲーム」でも発揮されたので大変有効であった。さらに、技能面だけでなく、児童同士の声かけやアドバイスをする姿など、児童が互いに高め合う姿が見られた。

今後は、他のゴール型ゲームにおいても「スリーサークルボールゲーム」などの制限付きのゲームを取り入れ、「ボールを持たないときの動き」を高める指導法の研究を深めていく。

質疑概要

○単元計画構造図がとても見やすい。作成にかかった時間は。

→もとは県立体育センターのもの。単元計画を練るのには時間がかかった。2～3時間程度。進めていく中で変えていったところもある。

○振り返りカードをまとめることで考えを深められると思うが、毎時間の振り返りカードのまとめ方は。

→年間通じての体育カードに貼りためていった。グループで回覧した。

○単元後「ボールを持たないときの動き」を楽しいと答えた児童が増えたとあるが、具体的には。

→挙手で聞いてみた。

○「スリーサークルボールゲーム」では、ボールをもらう動きが小さくなっていると感じたが、「メインゲーム」では、守りの後ろにまわってボールをもらいに行っていた。どうしたらそうなったのか。

→スリーサークルボールゲームに助けられた。練習を重ね、児童たちが動きを習得していった。

○事前アンケートをとり、単元指導計画を考えるのは良いことだが、今回は「スリーサークルボールゲーム」ありきだったのでは。

→アンケートが先だった。前々から、ボールを持たないときに課題があるのを感じてはいた。そこから考えていった。

○ボールを持たないときの動きを高めさせるのに「スリーサークルボールゲーム」は本当に有効だったのか。ボール保持者との位置・距離・動きとのずれでパスが通る。ドリブルなし、パスだけのルールでうまくできたのでは。

→本学級には運動がすごく苦手な児童も多かった。どう動いていいかわからず、かたまっていた。「スリーサークルボールゲーム」は、3つのサークルに向かえばいいんだと動きの目標になった。パスをもらえるようになっていった。

○円陣などは、教師がさせるべきものではないのでは。

→たしかにそれが望ましいが、クラスの実態から難しかったので、教師側が促した。その後、内発的に少しずつ生まれてきたのがうれしかった。

研究協議概要

協議の柱「ボールを持たないときの動きを高めるための学習指導の在り方」について等、グループ（4～5人）で討議をし、発表をする形で交流をした。

【ボールを持たないときの動きを高める指導について】

- ・ドリブルなしのバスケットボールはよくやる。
- ・アウトナンバー制は、必ず空くので、ボールを持っていない時の動きを意識させるのに有効。
- ・動きを見て学ぶという点で、きょうだいチームを設定したのは有効。
- ・ゴールの点数以外も点数化・評価対象にするとよいのでは。パスの経路の回数など。
- ・〇人にパスをしないとシュートできないというルールはどうか。
- ・フリーゾーンを作る。

【スリーサークルボールゲームについて】

- ・サークルという目に見える目標があって良い。
- ・パス成功回数を高められる。
- ・ディフェンスとの距離を保てる。
- ・ディフェンスの楽しみを感じられて良い。
- ・ディフェンスが上手になると、パスを出せなくなる。
- ・動きの中だけでパスやシュートの技能の向上は難しい。それぞれの練習も必要だったのでは。
- ・ボールを持たないときの動きは児童が重要性を感じにくいので、そこに点数がついているのが良かった。
- ・ハンドボールにつなげるために、ルールを緩和させていく工夫をしては。
- ・サッカーでは、蹴る技術が必要なため、応用するには工夫が必要。

【個々の技能の向上について】

- ・低学年のうちから投げる・捕る動きの基本的なことができるよう指導していく必要がある。
- ・ドッジビー、タグラグビーなどのニュースポーツが、投げる・捕る・スペースを見つけて動くのに有効か。

【苦手・できない児童を伸ばす】

- ・児童たちのスキルに差があるので、個別の目標を自分で立てさせる。
- ・触球数を数えさせ、いろいろな児童がボールに触れるようにチームで考えさせる。
- ・パスが繋がらない、ゴール前でシュートが入らないなど、課題に応じた練習を行っていくとよい。
- ・「何が楽しくなかったか」を聞き、そこからルールをつくっていく。

【社会的行動を高める】

- ・場づくりの工夫が必要。教師側からの働きかけが主になってしまいがち。“児童の側から”にもっていききたい。
- ・学習カードや円陣でも、道徳的なところが良かった。社会から求められている部分だと思った。

まとめ概要

- ・本実践の授業を実際に見た。サポート場所が目で見えるので、ボール運動が苦手な児童も動きやすくなっていた。きょうだいチームから指示がたくさん聞こえていた。
- ・ゲームをやさしくするための4つの視点
 - ①状況判断がやさしい ②技能やルールがやさしい ③プレッシャーが少ない ④道具や施設がやさしい
- ・コミュニケーション能力が親子で低下している。こちらで手立てを打って、教えていくことが必要。
- ・運動をする児童、しない児童の二極化が著しい。生涯にわたってスポーツをしてほしいという願いを持って指導にあたってほしい。
- ・技能・態度のねらいを絞った実践で良かった。
- ・苦手な児童をなんとかしたい、が我々の願いである。
- ・戦術理解が、基本的な技術より先だと考える。ゲーム - トレーニング - ゲームの流れで、成功体験をたくさん積み重ねてあげてほしい。
- ・道徳的な要素が多く取り込まれた実践であった。学級の実態に合わせ、ねらいを絞って取り入れていく。